

日本温泉科学会大会第 54 回大会

特別講演

皮膚病湯治の目標盛岡市上田病院
野口 順一**The Target of Spa-therapy of Skin Diseases**

Jun-ichi NOGUCHI

Ueda Hospital in Morioka

Abstract

The widely adopted treatments of skin diseases in these days tend to stick to the improvements of appearance of the skin, and stand on the principle of tentative superficial adorning treatments.

So they tend to deprive the skin of its original function of protecting inner body from outside. And, as those treatments prevail, skin disease patients with the drug habits have increased.

By re-evaluating spa-therapy which has been used for past two thousands years in Japan, and by using its preserving methods in some cases, or its training methods in other cases, I want to prosecute studying methods or ways of spa-therapy with the goal that the skin can regain its original function of adaptation to changes of nature and environment.

Key words : purify oneself by bath, preserving (training) methods→adaptation to changes of nature, play by bath→improvement of abnormal conditioned reflexes, release from drug dependence

キーワード：斎戒沐浴，修験道→訓練的浴法・保護的浴法→逆境に対応，遊浴→条件反射の改善，薬物依存症からの解放

1. はじめに

温故知新. 古代より現今まで，日本では，どのようにして皮膚病が治療されてきていたかを思い回らすことは，これからの皮膚病湯治の目標を定めるために必要であると考え。

古事記に拠ればイザナギノミコトはヨミノクニから逃げてこられて，ヒムカオのオドのアハギハラで水浴をされた。その時，脱いだ衣から煩神（ワズライノカミ）が成りました。日本における皮膚病治療の濫觴である。これは汚れを払う操作で，水治療法に依る汚染の拡散および洗浄である……

斎戒沐浴。

因幡の白兎では、海水浴と淡水浴との効率的な適用を考え、殺菌作用や滲透圧の作用を会得していたものと考え。

神功皇后の嬉野温泉、舒明天皇・皇極天皇の道後温泉、戦国時代の武将の隠し湯など、戦傷者の、弓矢や刀槍の創傷や兵火に因る熱傷などに対する治療が行われていた。

遣隋使また遣唐使など、大陸との交流が盛んになって、癩病や痘瘡までもが輸入されて、日本国内に伝播されるようになり、梁の武帝に倣って、光明皇后は僧医をして水治療法を施さしめ、また万葉集にも記述されているように、それらの治療のために、有馬での湯治も盛んに行われた。

その頃より、修験道が盛んになり、薬師信仰とともに、積極的に水治療法の手法が取り入れられた。滝修行や丑湯治(恐山)など、身体に強い刺激を加えて、その反応を利用するという考え方で、それに拠って、不動明王や大日如来との感応を得た。その試練を耐え抜いた者は、神通力を獲得して、行者として加持祈禱を行うことができた。それらの流れとして、滝修行、寒ノ地獄、丑湯治、江戸っ子の朝湯、また湯瀬、老神、下呂、奥津、依山、天ヶ瀬などの川原湯がある。

今までの清潔の観念に加えて、訓練的な手法に依って、逆境に対しても対応できる体勢を作り上げ、自然の激変をも克服できるようにしたわけである。

戦国時代末期から江戸時代にかけて、梅毒が輸入されて、日本国内に蔓延すると、やはり、修験道的な観念のもとに、梅毒の菌を焼き尽くすという考え方で、草津や鳴子、蔵王、草津、箱根また別府などで、強酸性硫黄泉の高温浴が推奨された。いわゆる時間湯である。それはサルバルサンや抗生物質剤が出現する大正、昭和の時代まで続いた。

大正、昭和の時代になると、種々の薬剤が開発されて、軟膏、内服また注射療法が進歩して、湯治や水治療法はだんだんとそれらに置換されていった。

殊に、健康保険制度が全国的に行き亘ると、それらの治療法のほうが効率的であり、また保険点数も高く、医師にとっても、利益が多かったので、皮膚病治療の大部分が保険制度で決められた方法で行われるようになった。

戦後、抗生物質剤やステロイド剤が発見され、それらの投与で即座に皮疹の外観が粉飾されることが患者にも医師にも好まれて、それらが濫用されるようになった。勿論、それらの薬剤を投与するにあたっては、それらの薬剤を適用する根拠、条件また投与計画が確立されていなければならないという規定はあった。しかし、一般の皮膚科診療所でも、研究教育機関や大病院の皮膚科でも、そのような規定は全く顧慮されることなしに、大量の抗生物質剤やステロイド剤が濫用され、医療機関と製薬会社の財政を潤し、一方、健康保険基金に圧迫を加えた。

最近になって、薬物療法の限界が論議されるようになり、また、巷に薬物依存症の患者が溢れるようになり、一方、耐性菌の出現により、抗生物質剤無効の症例が増加し、改めて自然主義的な治療、殊に水治療法や気候療法によって皮膚機能を賦活する療法が再び見直されるようになった。

2. 温泉水治療法の主な手法

- 1) 痒み・痛み：刺激閾値……浴温・pH・滲透圧・圧注
- 2) 汚染・細菌感染：(禊祓い) 拡散・洗浄・殺菌・落屑排除、抗生物質剤←→耐性菌
- 3) 炎症：炎症は必要！ 毒をだす、より、痂皮形成 ☆ステロイド剤依存症
- 4) 紫外線：海岸・山頂……UVA UVB UVC, 白色人種・黄色人種・黒色人種
- 5) 精神安定剤依存症：環境順応、遊浴……条件反射の改善
- 6) 保護的治療←→訓練的治療

3. おわりに

現今、憂慮すべきことは、患者も医師も、目前の皮疹の外観にのみ拘泥して、強力な消炎作用を有するステロイド剤や免疫抑制剤、また抗生物質剤や精神安定剤などを投与して、安易に、一時的な粉飾的治療法を繰り返していることである。このような治療は循環小数のように何時までも際限なく続いて、疾患は遷延し、究極には皮膚の萎縮と機能の低減を招来し、逆境にも対応できる本来の皮膚の抵抗力を減弱してゆく。

そのような結末に陥ることを防ぐには、皮膚病治療の方針を大転換して、それらの薬剤に頼らないで、時には保護的に、時には訓練的に温泉・水治療法の手法を組み合わせ、科学的に適用しなければならぬと考える。

参考文献

- Chlebarov S. (1991) : Thalassotherapie (XX.Congressus Internationalis Thalassotherapiae·Nordseeheilbad Borkum), 45-622, Grabe-Verlag, Immenstadt, Deutschland.
- I.S.M.H. (1998) : 33rd World Congress of the International Society of Medical Hydrology and Climatology. Karlovy Vary. 17-321, Galen, Czech Republic.
- 野口順一 (1995) : アトピー性皮膚炎の温泉・水治療法, 光雲社, 東京, 17-257.
- 野口順一 (1996) : 皮膚病の温泉・水治療法, 光雲社, 東京, 11-161.
- 野口順一 (2000) : 皮膚疾患と入浴. JIM (医学書院), **10**, 10 : 850-854.